

書法教育活動の展開について ——大学における書法学習指導の一実践——

森 哲 之

はじめに

各時代に見られる書の作品には、それぞれの時代に相応した様々な表現や様式があるが、これからの時代にはどのような書の創造がなされようか。また、書法教育の場において、創作活動はどのように進められようとしているのか。現在、書の専門分野を持つ各大学では、現代の書のあり方や書の創作の可能性が模索されている。同様にして、本学においても学生による多種多様な制作活動が重ねられてきた。

本稿では、広島文教女子大学人間科学部人間文化学科芸術文化コース書道専修における書法教育活動の指導実践について述べてゆく。前身の文学部国文学科書道専修が15期、そして、学科改組した人間文化学科が4期続く。また、人間科学部初等教育学科児童教育コースには、書写書道専修が置かれている。筆者は、国文学科書道専修11期の卒業学年から担当し、複数の専任教員及び非常勤教員と共に指導に当たってきた。続く人間文化学科は3期までの卒業を果たしたが、この3期間の卒業制作の指導実践内容を中心に述べる。なお、この内容については、2006年7月9日に、安田女子大学において開催された第5回書法文化書法教育国際会議で口頭による研究発表を行ったものである。

1. 書法教育活動の概要

人間文化学科のカリキュラムには、高等学校教諭一種免許状（書道）取得に対応した書道の専門教育科目を設けている。また、1年次には、芸術と文化に関わる専門教育科目として、「技法研究Ⅰ」「デザイン研究」がある。演習科目としては、2年次に「人間文化基礎演習」、3年次に「人間文化専門演習Ⅰ」、4年次に「人間文化専門演習Ⅱ」及び「卒業研究」をそれぞれ通年で開講している。学科の特色ある科目としては、フィールドワーク、「陶芸制作」「水墨画」等がある。

芸術文化コースには美術専修と書道専修があり、本演習科目に位置付けられる展覧会活動を両専修共同で開催している。春季に学外会場において、美術・書道専修2、3年生による展覧会を開催し、秋季には、1、2、3年生による比較的作品規模の大きい文教祭芸術作品展を開催してきた。なお、夏季、冬季には集中した錬成会を行い、定期的に批評会を行っている。

4年次には、卒業制作として、書道専修では臨書1点、創作2点の計3点を課している。構想発表会、中間発表会、批評会等を経て、卒業制作展を開催する。さらに、広島文教女子大学卒業制作展出品作品の図版及び制作意図をまとめたものとして、『芸術文化卒業作品集』（2003～2005）を、また、そのCD-ROM版の作成を行っている。いずれも学生の編集による。なお、この電子版は、広島文教女子大学ホームページにおいてWeb上で公開しているので参照されたい。
(<http://www.h-bunkyo.ac.jp/koho/sotuten/>)

また、人間文化学科は、文化の創造、伝達、活用をテーマとしており、特に芸術文化の領域

では、学生自らの発想で主体的に制作活動を進めてゆき、新たな創造を目指すところである。そして、現代の環境、社会、文化等を反映させ、作品の目的、意義、主張等を明確にし、独自の書表現を探求している。そこで、芸術文化コースでは、制作展で作品発表をするとともに、展覧会の広報活動を積極的に行い、事後においてもさらに情報発信を行うところである。

2. 臨書作品制作における書法学習指導

書の作品制作における学生の制作過程について、その事例を述べる。臨書では、対象とする古典等の書法の獲得が目指される。まずは、その書の結体、運筆等の忠実な書法の再現を目標としている。さらに、臨書においても、創作同様の制作意図を持った作品の展開が考えられる。自己の解釈や工夫を加え表現するというものである。学生が参考にした先人の特色ある作品としては、例えば、王鐸、中林梧竹、中村不折、井上有一等の臨書作品が挙げられる。そこに見られるのは創意を加味した方法であり、創作的な臨書表現ともいえよう。古典等の捉え方や作品としての表現のあり方を多角的に検証し、新たな形で再現しようとする試みである。また、臨書作品制作を通じて書表現の特質を見出し工夫してゆくことは、創作をしてゆく際の方向付けや自己の書風形成を確かなものとする。以下の作品は、学生による臨書作品の一部ではあるが、制作事例として後半部に図版を掲載しておく。

- ①臨 玉泉帖 (204×420) ②臨 鄭長猷造像記 (300×392) ③臨 灌頂曆名 (270×280)
④臨 祭姪文稿 (270×210) ⑤臨 天發神讖碑 (272×210)

3. 書の創作における書法学習指導

次に、書の創作については、古典等に見られる文字造形の面から書表現がなされる場合と、詩文等の題材の内容面から書表現がなされる場合とがある。そして、一つには、何かしらの書法や書式に基づき、倣書等を経た堅実な作品形成が考えられる。一方、現代の環境や社会等に相応しいものを開拓することを考え、具体的、実際の場面を想定し制作を進めさせる。そこで、創作作品では、現代における作品という視点を積極的に考慮し、現代の環境や社会等に照らし合わせ、作品の現代的な意義、目的、生かされる空間、書表現における主張、独創性等を明確にしようとしている。その他、新たなコンセプトやテーマ性をもった書作品の検討を試みさせている。

創作作品の制作において、学生個々が書をどのように捉え、書を通してどのような制作を試みたか、次にいくつかの卒業制作の事例を挙げ、学生作品の制作過程における創意工夫について触れる。なお、学生が作品集にまとめた制作意図を元に補足する。また、以下の作品は、学生による創作作品の一部であるが、制作事例として後半部に図版を掲載しておく。

- (1) 「遊戯 一宮沢賢治詩 原体剣舞連一節一」(202.5×420)

俵屋宗達の風神雷神図を背景に模写し、宮沢賢治の詩文を合わせた作品である。全体構成において、書画の調和を図り、漢字と片仮名を交え、躍動感のある重厚な線質で書表現をしている。彩色においては、背景に紫と金を使い、書の墨線と呼応するよう配慮している。書は空海の灌頂曆名を基調とし、富岡鉄斎、棟方志功、須田剋太、勅使河原蒼風、岡本太郎等の書を参考にしていたものである。

- (2) 「文字に孤悲（戀）した人たち」(180×300)

戀に「孤悲」を当て、穂先の短い刷毛を用い、朴訥ながら端的で鋭く勢いのある線で表現し

ている。背景には、大和から鎌倉時代までの古文字資料、古筆、歌仙画を臨模したものを貼り混ぜた作品である。

(3) 久都内正也詩「原爆の日」(210×270)

原爆を受けた子どもの詩であるが、惨状を見たままがつづられ、生々しい情景、その苦しみやむごさを書で表現しようとしたものである。制作過程では、井上有一の書を実見し、紙面を真っ黒に埋めつくす表現、荒々しい表現など、書く度に異なる手法を用いていた。最終的には視覚に訴えようとし、自身の思いを存分に表現する大作とした。戦争の悲惨さを訴え平和への祈りの表現ともいえるピカソの「ゲルニカ」、書においては、井上有一の「噫横川国民学校」等に通じる書表現を試みていた。

(4) 「慶一福祿寿 瑞相 吉祥 常楽一」(235×97, 4幅)

芹沢銈介の文字絵作品、朝鮮半島の豪快かつ流麗な飛白書を参考に、飛白による律動を応用した表現をしている。刷毛を用い、遅速緩急の変化に富んだ複雑な線を駆使し、絵文字としての造形にユーモアがある。

(5) 創作における独自性と創造性のその他の例

その他に、特色ある書の作品として、写真の紙焼きの技法を活用した作品、画仙紙に色彩装飾等を施し詩文を書いた作品、料紙を制作し和歌を書いた作品、アクリル板を活用した作品、陶芸の技法を活用し文字を組み入れた作品、水墨による作品、刻字作品等が挙げられる。柔軟な発想で多様な技法を駆使し、創造性に富む工夫が多々見られる。

- ①ヒカリヒト (41.7×52.2, 8枚) (写真・印画紙)
- ② 銀色夏生の詩「プロローグ」 (136×210)
- ③ The Rainbow (32.5×110, 2枚) (アクリル板)
- ④ 折楊柳歌 (部分) (137×35), 4枚中の2枚 (刻字)
- ⑤「見」(43.2×35.6, 20枚) (印画紙)
- ⑥ 心のともしび「和敬清寂」(36×25, 4枚) (陶板)
- ⑦ 虹 (70×272)
- ⑧ 夏の夜 (60×90, 2枚) (料紙及び書)
- ⑨ 空 (52.5×229)

4. 書法教育活動の取り組み

書作品制作において、学生が主体的に制作活動を行い、独創性を発揮していけるよう、まずは自由な書表現が可能であることを示してきた。現代における書のあり方を検証し、これまでに見られない独自の書表現を見出し、新しい作品を生み出そうとするものである。例えば、戦後に見られる多様な書表現の展開、他の芸術分野等の動向等を含めて、広い範囲で書の創造を模索する。また、書の歴史におけるそれぞれの書の良さや時代性を見出しながら、現代の環境、社会、文化等を反映させた書を探求しようとしている。

書作品の題材やテーマについては、学生自身の意志、発想を尊重し、自ら創造しようとするところから始める。書の創造における必然性を重視し、自身がどのような作品を作りたいのかを整理させ、他者の表現との違いを認識しながら、作品の目的、意義、主張、意図等を明確にしてゆく。言葉や文字に自己の思いを込めて書表現する際に、最も適した表現方法を取捨選択し、様々な書法の追体験を元に、自身の作品を大きく変化させてゆく。固定化せず、常に新しい表現の模索を繰り返すことにより、特定の書法の模倣を超えてゆくことになる。型に当てはめる表現とは異なり、学生は、自身が作品制作の初期の段階に予測しえなかった書の創造に向かうことになる。学生による書の独創性は、自他の予測を超える方向に展開した時に発揮されることが多々見受けられる。

また、本学での特色としては、美術専修学生と書道専修学生との制作過程での直接的な交流

があるため、作品のあり方に大きく関わり刺激し合える点がある。他の芸術との比較を通じて、書の作品のあり方を客観的に考えるようになる。そのような中で、書作品ではどこまでが模倣で、どこからが自己の創造なのかを考えようとする傾向がでてきた。そして、現代という視点を合わせ持つことにより、新たな作品に向けた取り組みがなされ、これからの書の可能性を切り開く姿勢が出てくる。現代を見据えた書の創造という視点は、書法文化の一層の推進に繋がるものと考えられる。

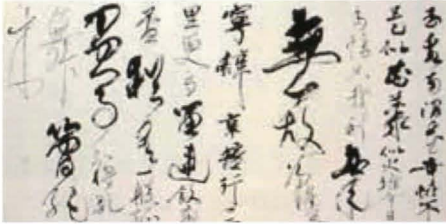
おわりに

作品制作の指導では、学生個々の制作動機を最も尊重し、書の表現における独自性、創造性を引き出すために、学生には主体的で自由な活動をさせ、自らの発想による作品を求めている。制作の初期段階では、大いに多様な書法や書式を分析、検証してゆくが、自己の作品を組み立てさせるために、指導者が特定の枠組みを設けることなく、現代の表現としての特性や必然性を考えさせる。

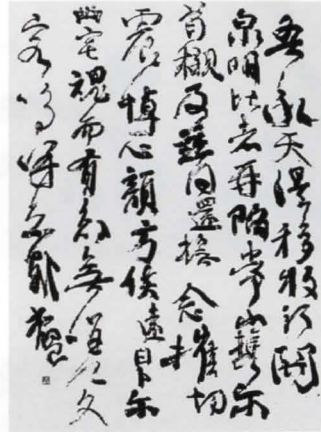
書の表現には、何らかの書法や書式に則るものがあり、また、新しい理念、発想を持ち新たな創造がなされてゆくものなど様々にある。各時代に見られる特色ある書の作品は、歴史や伝統を踏まえつつも、その時々新しい表現や様式を創造してきた。古代の文字資料から、書の古典、現代に至るまでの多様な書の姿に見られるように、これからの時代に見合う書の創造が求められよう。他の芸術分野との融合を積極的に考えることも、書の文化や創造活動の広がりに繋がるのではなかろうか。

(図版資料)

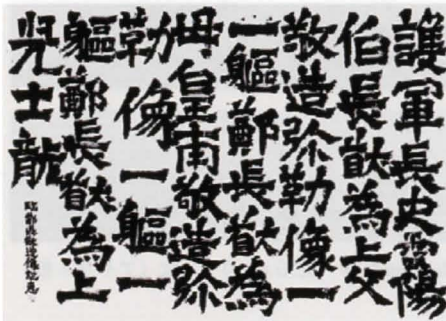
2. 臨書作品制作における書法学習指導



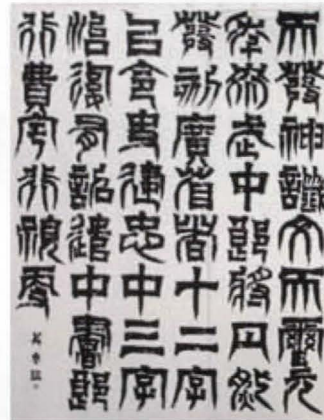
① 臨 玉泉帖 204×420



④ 臨 祭姪文稿 270×210



② 臨 鄭長猷造像記 300×392



⑤ 臨 天發神讖碑 272×210



③ 臨 灌頂曆名 270×280

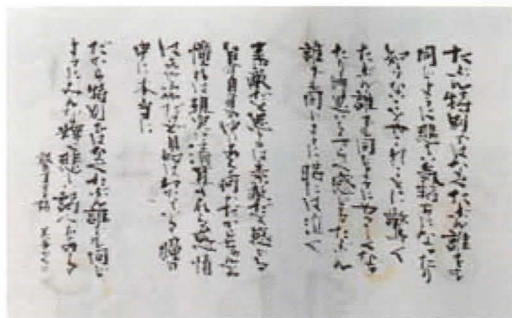
3. 書の創作における書法学習指導

(1) 「遊戯 —宮沢賢治詩 原体剣舞連 一節—」

202.5×420

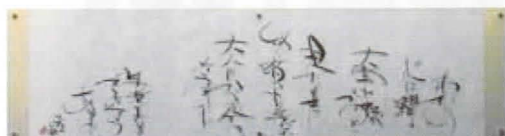
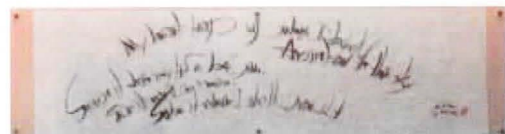


(2) 「文字に孤悲（戀）した人たち」 180×300



② 銀色夏生の詩「プロローグ」 136×210

(3) 久都内正也詩「原爆の日」 210×270



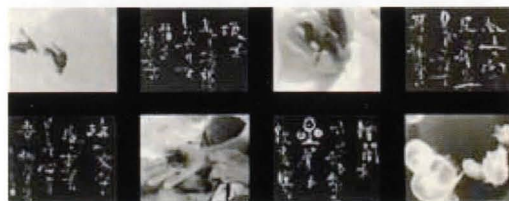
③ The Rainbow 32.5×110 2枚 (アクリル板)

(4) 「慶一福祿寿 瑞相 吉祥 常楽一」 235×97 4幅



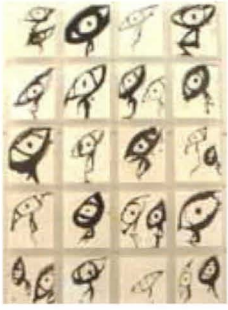
④ 折楊柳歌 (部分) 137×35

(5) 創作における独自性と創造性



① ヒカリヒト 41.7×52.2 8枚 (写真・印画紙)

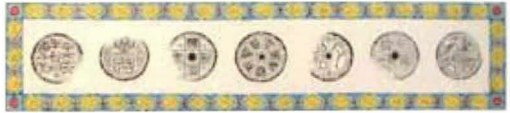
書法教育活動の展開について



⑤ 見 43.2×35.6 20枚



⑧ 夏の夜 60×90 2枚 (料紙及び書)



⑨ 空 52.5×229



⑥ 心のともしび「和敬清寂」36×25 4枚 (陶板)



⑦ 虹 70×272